I saw the light.

……河島 陽子

晴れわたり きらの光
ひらり
はじめて世界に出会った日
ガラガラは音を立てて
頭の上で 静かにはじけるピンク 笑い声

愛も不安も生きる意味も
全ては私の中にあった

時は過ぎて
思い出せない秘密の在処
引き出しの取っ手は所在なげ
どこに仕舞った？
足りない部分を いつも気に病んで
クローバーを食む 一匹の羊

からからに乾いた手足を伸ばして
飛ばせ 胸の痛みは 胞子のように
着地した土の上
這いつくばって 捜し求めて
あなたに出会えた それが奇跡

© Yoko Kawashima 2010

尊い未来
恐れながら 向かうその先に
答えがあるみたい
卯の花月夜に
歩き出そう
話そう

手をつなげば この流れに身を沈めても
ひとつぶの星になれるでしょう
漣がやがて深みに のみこまれても

私は見た
あなたが放つ その微弱な
空五倍子色(うつぶしいろ)の光を

© Yoko Kawashima 2010

森の奥

森に入る
子供たちをからかうためにか
散策路の起点より
ほどなく現れる大きな木の枝に
かかしが首吊りで
さらされている
私たちは殊更におびえたふりをして
それを指さし叫びたて
森の奥へゆく
笑いながら

堆積する落ち葉のなす
柔らかな土の上を歩み
やがて見つける
嵐に負けた巨大な倒木
それに馬乗りになり
死にかけの脆い木肌をはがす
無我夢中
ささくれた木の棘の
痛みの感触よりもなお
生木のすべらかさを
確かめるために
遂に懐から取り出されたナイフを
容赦なく振るえば
むせるほどの木の香に
空気は濃度を増し

© Yoko Kawashima 2010

私たちを取り囲んでゆく—

首吊り死体よりも怖いこと
「火の戦い（la guerre de feu）」の映画
深夜の街で特別に買い与えられる芋のフライ
街灯の下 熱烈なキスをする男女
庭に放たれたドーベルマン二頭

森は多分知っている
これらのことと
それが私たちにもたらす効果を
木の上で
私たちは視線を交わす
子供たちのほとんどの秘密は
こうして作られるのだ

© Yoko Kawashima 2010

電信　（ラボリ）

ある真昼のこと
支えるべき神殿すら持たない
コンクリートの円柱が
等間隔に立っている
両脇にハッキリと銅線を束ねて

見上げると線は
空を明白に区切っている
その遠さを恐れ気もなく 鷹揚に
空は今 分断された蒼だ　しかし
円柱はボルトのあれこれで
その手にある物を
つなぎとめるのに必死であるらしく
この事態に
目を向ける素振りもない

いつよりそこに在るのか
知る由もがない彼は
日々そこに立ち、
つなぐ―ある使命感をもって
そして思考してはならない
一たび 囚われれば分からなくなるからだ
そこが空の中心なのか
或いは底なのか
彼は耳を澄ます―。

© Yoko Kawashima 2010

つま先だって線上を
音が移行する
手練れたサーカスの綱渡りのように
交わされる電信はそれぞれの重さを持って
滑ってゆく 待ち人の元へ
円柱は尚のこと
つなぐ手に 力をこめるのだ
他でもない彼には
伝言の一つさえ 届くこともないのに

列柱の合間をぬって
ツガイの鳥が北へと向う
人群れは西へ西へと行く
やがて夕闇の訪れと共に灯はともり
銅線の上を声が行き交う
「帰るよ」と
その先のもの
温かいとは限らない場所を
私たちは棲家とし
その下に集えば
無論 あの円柱のことなど考えもしない
ただおろおろと外に立ち
息をひそめて
朝に 夕に
待ち続けている彼のことなどは

今彼は
祈りに似た仕草でその頭を垂れて
蛍光の火を空高く掲げている

© Yoko Kawashima 2010